

就業体験で学んだコミュニケーション能力

Y 大学：人文学部・人文学科・3 年

期間：令和 5 年 9 月 4 日～6 日（3 日間）

就職先として IT 業界にも興味があり、業界理解を深められることや、実際のプログラミング体験ができる点、事業の幅広さに惹かれ、こちらの就業体験に参加した。

1 日目は、会社や IT 業界、社員の方の業務についてのオリエンテーションと、プレゼン資料作成のワークショップを行った。オリエンテーションでは、IT 業界や会社概要について説明いただいた。地方の営業所ではあるが、全国に顧客を持つという点が印象的だった。また、複数の社員の方にそれぞれの業務を説明していただく機会があった。今までは、IT の仕事に対して漠然としたイメージを抱いていたが、より具体的な業務内容を知ることができた。後半はプレゼン資料作成の講座があり、実際に自己紹介資料の作成、発表を行った。レイアウトや構成のコツなど、今後にも役立つ内容を学べ、受講できて良かったと思う。

2 日目は、課題解決のワークを行った。架空の顧客を想定し、顧客の抱える課題に対する解決策や提案書を考えた。社員の方とともに解決策を考えていく中で、自分にはない視点を獲得ことができ、思考の幅が広がった。解決策について検討する際、「Yes, and」を意識して議論を進めていると伺った。一見実現が難しそうなアイデアについても、まずは相手の意見を一旦受け止め、そのうえで実現可能な方法を前向きに考えるという姿勢や、思考を固定化せず、柔軟に考える姿勢を学んだ。アイデアを出し合う際には、まずは肯定的に、かつ柔軟に考えることを今後も意識していきたい。

3 日目は、プログラミングを体験した。フリーソフトを使用し、電気を点灯させるプログラムや、エレベーターを動かすプログラムを検討した。課題解決の手段や方法を検討する作業と、それをプログラムに起こす作業にはまた別の難しさがあった。体験を通じて、課題を解決するために必要な思考の枠組みを知ることができた。

就業体験を通じて、コミュニケーション能力の重要性を痛感した。システム開発では、IT 企業と聞いてイメージされるような、プログラムを書く作業は最終段階で、実際には顧客とのヒアリングを受けて解決策を練ったり、どのようなシステムを構築するか検討したり、システムの仕様について顧客と話し合ったりといったプロセスに時間がかかると伺った。場合によっては、IT 以外の方法で解決することもあるそうだ。顧客の相談から課題を抽出するためには、傾聴力が必要になると実感した。さらに、システム導入の妥当性、有効性をお客様に納得していただくために、分かりやすく伝える力も大切になる。どこへ行くにもコミュニケーション能力は求められるが、今後は聞く、伝える力を特に意識していきたい。

3 日間という短い期間ではあったが、オリエンテーションやワークショップを通じて IT 企業の業務を体験することができた。今回学んだ、アイデアを肯定的に柔軟に考える力、傾聴力、伝える力を今後の就職活動、あるいは就職後にも活かしていきたい。

普段学べないことを学びました。

T高等専門学校：情報電子工学科・4年

期間：令和4年8月22日～26日（5日間）

私は今回のインターンシップでケーブルテレビの編成制作部にお邪魔しました。まず、1日目に市内の中学校の卓球部に取材をする番組の撮影をしました。そこで、撮影器具の使い方や設置の仕方、マイクの取り付け方などを学びました。カメラひとつの設置でもたくさんの作業があり、覚えることがたくさんあって大変でしたが、初めて大きいカメラに触ってとてもワクワクして楽しかったです。続いて2日目には幼稚園の取材をした後に、バスとタクシーの撮影をしました。1日目は、インターンシップで一緒になった方と2人で1つのカメラの設置をしましたが、この日は制作部の方に教えていただきながら1人でカメラの設置をしました。1日目に教えていただいたことがうまく出来ないところもありましたが、1日目よりもスムーズに設置することが出来ました。また、番組制作では撮影者の様子などをうかがいながら撮影を進めました。相手が自分の気持ちを言葉にしなくても、顔の表情や動作などで状態を察して相手がリラックスできるように誘導することが大切だなと思いました。3日目に市役所で防災についての撮影を行い、その後に街頭インタビューをし、午後に撮影したビデオの編集作業をしました。2日目から3日目にかけてたくさん撮影器具の撮影準備をしたので、この2日間で撮影器具の設置を1人で出来るようになりました。街頭インタビューでは商店街で歩いているひとに声をかけて防災の取材をしました。取材の依頼をするのはすごく勇気が必要だったので断られたときは少しショックでしたが、取材交渉を承諾されたときはすごく嬉しく、やりがいを感じました。また、取材をするときにカメラを初めて肩の上に乗せて撮影をしました。カメラはすごく重くてバランスもとりにくく大変でした。撮影には、体力や筋肉、バランスも必要になってくるんだなと思いました。午後には、午前中に撮影した市役所での防災の撮影の編集作業をしました。編集作業では主に映像のカットやペースト、音量調節、違う映像の音と画面を同じ画面で流したりしました。観ている人が聞きやすいように、見やすいように作業をしていくのはとても難しかったです。この編集作業で、映像をつくるという仕事は観る人のためにしている仕事なんだなと改めて感じました。4日目の梨生産組合の取材では自分たちで映像の撮影をしました。以前までは撮影器具の準備だけをして、撮影は制作部の方々がしていましたが、この日に初めて自分で撮影をしました。撮影の対象物はぶどうや梨だったので、どうすれば美味しそうに見えるのかを考えながら撮影をしました。撮影には光の当たり方や、空間をどう使うかなどたくさんの技術があり、上手くは撮影できませんでしたが、すごく楽しかったです。5日目では、ニュース番組の公開撮影に同行し、間近でニュース番組の撮影に立ち会うことができ、とてもドキドキしました。そこでわたしの役割は公開撮影を観覧しに来てくださった方々が最後に質問などを投げかけるときのマイクを持っていくことでした。ニュース番組を現場の皆さんと一緒に撮影出来てとても楽しかったです。8月22日～8月26日の5日間で、5日とは思えないほど充実した実習をしました。5日間で学んだことをこれからの生活に役立てていきたいです。

「相手に伝わるということ」

YK大学：国際文化学部・文化創造学科・2年

期間：令和4年8月29日～9月2日（5日間）

私は今回、広告会社の営業のインターンシップに参加させていただいた。このインターンシップの中で最も印象に残り、学びとなったことは、「相手に伝わる」という考えだ。相手に伝えることは容易にできるが、必ずしも伝えた情報が相手に伝わっているとは言えない。そのため、伝えると伝わるは、全く異なる表現であることを学んだ。「相手に伝わる」という考えは、クライアントの相談や、提案の際に営業にとっては欠かせないものだ。しかしながら、デザイナーも同様に「相手に伝わる」という考えが必要だということも、デザイナーの方に話を伺ったり、製作された広告やホームページを拝見したりすることを通して実感した。「相手に伝わる」仕事をしていくために必要な要点が3つあると私は経験を通して考えた。

1つ目は、事前準備である。事前準備とは、参考資料やクライアントの情報、提案材料をクライアントに会う前に頭に入れることだ。提案をより納得してもらうためには、相手の現状と提案の根拠が必須だと、営業同行の中で感じたからだ。

2つ目は、相手の動線を考えることである。相手の動線とは、まずどのような企業をターゲットにし、その企業がどのような目的で何をしたいのかを明確にするということだ。これを行うことで、企業に対し効果的なアプローチができ、情報の伝わりやすさが向上すると学んだ。

3つ目は、改善していく姿勢である。常にどう改善したらよいかを営業内でも、クライアントの方とも話し合う姿を5日間の中で幾度となく目にした。さらに、その改善しようという心意気が、クライアントの心を強く動かしているように私は感じた。だからこそ、改善しようとする姿勢が最終的には相手に伝わることに繋がると考えた。これらの3つが揃って「相手に伝わる」ということが可能になると考えた。そして今後の私自身の課題として、3つの要素を意識して、授業におけるプレゼンテーションや作品制作を心掛けていきたいと考えた。

また、私はインターンシップ前後では、営業に対する考えや印象が大きく変化した。インターンシップ以前では、営業は商品をアピールして、企業に買ってもらうことが仕事だと考えていた。しかし、インターンシップを経験して、営業とは、クライアントの課題を解決するために、自社が出来ることをクライアントに提案していく仕事でもある、と学び、営業が魅力的に感じた。この変化は、私にとって仕事に対する視野の狭さを気付かせてくれるものだったと言える。一度体験してみると、向き不向きや、仕事の意外な一面を知ることができる。このことを改めて実感できた瞬間でもあった。インターンシップを通して、自分の未熟な部分や、強み、仕事に対する考えの変化など多くの学びを得た、充実した5日間であった。これからの成長のために、この経験を活かし、授業や就職活動に励んでいきたい。

まちの情報と想いを発信する

T大学：経済学部・現代経済学科・3年

期間：令和2年9月8日～11日（4日間）

私は将来、地元の魅力を発信する仕事に就きたいと考えています。なぜならば地元の魅力を発信することで、地域活性化に貢献したいからです。発信するといっても行政や観光など様々な職業がありますが、今回は地域に密着しているケーブルテレビの制作部のインターンシップに応募することにしました。

インターンシップに参加する前は、ケーブルテレビとは、地域のテレビ番組を制作する会社という漠然とした知識でしたが、四日間の研修をさせて頂いたおかげで業務内容をしっかりと知ることができました。その中でも意外だと感じたのは、ケーブルテレビは放送局でありながらケーブルの契約を取る必要があるため、番組を作る制作部だけでなく営業部や技術部があり、業務内容が多岐に渡っていることです。

また、研修中に度々感じたことは、社員の方々の正しい情報を届けようとする強い想いです。番組に出演されている方の意図を正しく視聴者に伝えられるように、現場での打ち合わせや取材での確認、原稿や編集の仕方、放送前の確認などが常に入念に行われていました。

また、特に印象的だったのは表題にもある通り、何事にもまちの情報と想いを発信することをもって行動されていたことです。入念な打ち合わせや細やかな確認をすることが正しい発信につながりますが、それらに加えて、まちの人々とのつながりを大切にされているのを感じました。例えば、取材先では、挨拶と撮影をさせていただけることに対する感謝の気持ちを仰っていました。そうすることで取材を受けてくださる方との関係がスムーズになり、結果的により良い情報を引き出せることに繋がっていると捉えました。このような対応を心掛けることで、まちの人とのつながりを深くし、まちの情報や想いを発信できるだけでなく、市民皆で作るまちづくりにつながっていくのではと感じました。

また、カメラなどの重い機材を運んだり、時には長時間に及ぶロケがあったりなど、ケーブルテレビの制作部は体力的にも大変な仕事です。しかし、仕事をされている皆さんはそんな大変さを感じさせず、精力的に仕事をされていました。やはりここでも発信する側の社員の皆さん自身に誇りとやりがいを感じました。ケーブルテレビは、まちの皆さんに寄り添ってまちのために発信しているという自覚を持たれていることが良い発信ができていることに繋がっていると思いました。

今回四日間と短い期間ではありましたが、非常に貴重な体験をすることができました。冒頭にも記述しましたが、“地元の魅力を発信する”まさにケーブルテレビは、それを担っているのだと改めて感じることができました。今回体験したことを、今後の学生生活さらに社会人になった時にしっかりと生かしたいと思います。

最後になりますが、研修に参加するにあたって、ご多用中にも関わらずご指導していただいた皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

放送業界への魅力が増した5日間

K大学：経済学部・経済学科・3年

期間：令和元年9月2日～6日（5日間）

私はこのインターンシップ研修に参加したことで、ケーブルテレビ局の仕事の流れを理解しました。研修前はテレビ業界に興味はありましたが、その仕事内容については無知の状態でした。そのような状況でこれから就職活動を行うことに不安を感じていたため、今回の研修はとて貴重な体験になりました。

5日間の研修では取材に同行して、その様子を見学したり、実際にカメラなどの機材に触れ、撮影を行ったりしました。撮影時には映したいものに対してカメラの位置や角度を変えると、映したいものの見方がかわったり、光の当て方によってきれいな映像を撮ることができたりしました。私たちが普段見ているテレビの映像は、こうした工夫によって視聴者の心を動かしているのかと思うと、興味がさらにわきました。また、インターンシップ研修中の姿を、研修生によって撮影し合い、その撮影した映像を編集し、ニュースで流す一本の映像を作成しました。作成過程のなかで、読む側が見やすく、そして読みやすい原稿の作成方法や、作成した原稿に沿った映像の編集方法を学び、一つの映像を作る流れを理解しました。撮影の時にはたくさんの角度から撮影を行いましたが、実際にできた原稿は短く、それに合わせて撮影した映像も編集して短くするため、実際に使用した映像はとて短くなりました。1時間程度かけて撮影したものは、放送時には1分から2分に凝縮して伝えなければならないため、どの映像が視聴者に伝わりやすいかを厳選することに難しさを感じました。

このインターンシップ研修を通して、研修前よりもテレビ業界における仕事内容について理解が深まりました。私のケーブルテレビ局に対するイメージでは、カメラマンやアナウンサーなどが専門の仕事を持ち、それぞれが仕事を分担しながら映像を作成しているのかと思っていました。しかし、実際には民放テレビ局のように、アナウンサーやカメラマンなどのような専門の仕事のみを行う人はいないため、一人ひとりが取材や撮影、映像の編集作業、原稿作成を行い、なかにはそれに加えてアナウンサーを行い、一人ひとりがたくさんの仕事をこなして、映像作成を行っていました。

なので、ケーブルテレビ局では放送する映像を収録するまでの過程に多く携わることができ、私はそこに魅力を感じました。また、私が研修前に想像していた以上に、ケーブルテレビ局は地元住民にとって、地域の情報を知る手段として愛されていました。番組のロケに同行した時には、地域住民から「いつも見てるよ」などの声かけがよくあり、私は5日間のみ研修でしたが、不思議とうれしい気持ちになりました。

このインターンシップ研修を通して、ケーブルテレビ局で働くことに対して、とて魅力的に感じるようになりました。そして、コミュニケーションの大切さを改めて実感しました。このインターンシップでは、放送制作部の方々から就職活動に向けてのアドバイスや、社会に出る前に大学生活中に行うべきことなどたくさんの話を聞くことができました。これからも、社会で働いている人などとコミュニケーションをとり、自分自身を高めていこうと思います。